日本鰹漁業の經濟的研究 (1)

農学博士 伊豆川淺吉

The Economic Studies of Japanese Bonito Fisheries

Asakichi IZUKAWA

方法論

(1)

日本の鰹漁業を總括し，経済的に論究せんとするに当り，此処にとる所の態度は索出的 Heuristisch 手段として，唯物史観の援用を得つゝ，歴史的実証的方法を基調としている此の様な学的態度につき，説明を要する点が三つある。一は何故に歴史的方法に依つて，理論的方法に依らなかつたか。二は何故に唯物史観を索出的方法として使用したか。三は歴史的実証的方法と，唯物史観との関係である。

今日の鰹漁業は，勿論一面に於ては，資本制生産様式の下に経營されているものとして理解出來る。此の限り鰹漁業は，所謂資本家社会を対象とする理論的社会科学としての，水産経済学の対象となり得る。是には異論が少い事と思ふ。所で理論的社会科学の性格は如何といへば，Carl Menger は「理論的社会科学は社会現象の現象形態と，その繼起，その共存などの法則を吾々に説明しなければならぬ」ものとする。所謂理論的経済学は，理論的社会科学の一分枝と考えられ，更に水産経済学は理論経済学に対して部門経済学の地位にある。

扨理論経済学の発展は，人々の知る如く，英国古典学派の Adam Smith, Thomas Robert Malthus, David Ricardo 等によつて著しく進められ，J.S.Mill に至つて更にその形式を整えられた。古典学派の方法は，個人主義的立場に立つて，経済現象に対し，客観的に普遍化抽象化を加え，普遍に妥当する経済法則を求むるにあつた。古典学派について起つた奥太利学派に於ては，Carl Menger, Friedrich von Wieser, Eugen von Böhm-Bawerk 等によつて，價値論を中心として理論の内容が一層精緻に展開された，彼等のとる方法は，主観的心理的なる点に特徴があつたが，目指す所は経済現象に対し，普遍化抽象化の手段を加え，古典学派より以上の精密さを持つ経済法則の体系を成立せしむるにあつた。後に歴史学派と方法論爭を試みたCarl Menger をして語らしめよう。

吾々が此の（理論経済学）目的のために国民経済の現象を選ぶなれば，国民経済的現象

の現象形態と法則の確立，定型と定型的関係の確立が理論的研究の課題である。吾々は国民経済的現象の変化の中に繰返される現象形態，例へば交換價格地代供給需要の一般的な，若しくはこれらの現象間の定型的関係，例へば需要供給の増減の價格に及ぼす影響，人口増加の地代に及ぼす影響などを確立しようとする事によつて，理論的経済学の完成につとめることになる（Carl Menger, Uutersuchungen über die Methode der Sozialwissenschaften, uud der politischen Oekonomie insbesondere,）

彼は，研究の対象を特定の領域に限定し，その内部に於て定型的関係を求むといふ。換言しよう。特定の領域を資本家社会とすれば，そこには私有財産制と自由競争が前提されて居り，そこに行はれる経済現象には極度に資本主義的原理が支配している。従つて，求められた定型的関係即ち交換價格地代需要供給等の諸法則は，總て資本家社会に特有の性格を持つものである。是は当然の事柄であらう。

斯つて，当面の問題たる鰹漁業の経済関係を見るに，其処に看取される資本制生産様式は，飽迄一面的のものである。後に詳述する如く，他の一面に於ては仂労技術の関係，進んでは分配の分野に至る迄，原始共産体的遺制乃至は封建体制の遺産を濃厚に具有して居り，然も是等の遺制遺産が今尚生命を持つ。といふ事は，今日の鰹漁業は，未だ完全には資本主義経済原理に支配されざる一面を持つといふ事である。従つて，資本家的水産業を前提し，その現象形態を対象として，それより定型的関係を求めて到達する，法則体系としての水産経済学を期待するといふ理論的方法に於ては，前述の遺制遺産を見落す恐れがある。是を看過した場合には，鰹漁業の眞髄を摑む事は出來ない，眞髄に觸れんが爲にはその遺制遺産が今日に尚生命を持つている事，進んではこれが殘存する程，何故に鰹漁業の発達が遲々としていたか。換言すれば，その発達の過程が問題として論究される必要がある。此処に歴史的方法がとりあげられる根據がある。

鰹漁業の発達の未熟さを説明せん爲に採る所の歴史的方法は，鰹漁業史解明の爲のみに必要とせられるのではない。鰹漁業を契機として，更に広範なる経済一般の発達過程に，歴史的方法を適用せんとする含みを持つ。それは次の如くである。鰹漁業の発達が，他の資本家的漁業の発展に比して，その資本主義化が遲れているといふ事は，既に資本家的漁業中に高度の発達程度に達せしものあるを予想しているからの事である。漁業一般の発達の如何は，我国産業の資本主義化の現段階を予定しているから問題となし得る。よく云はれる我国産業を通じて見られる発達の後進性は，既に世界に於ける先進国経済の発達を前提しての言葉である。此の様に，歴史発達の過程に，或一定の標準を立て，それに従つて経済発展の段階説を求め，それを基準として一国経済発達の程度を測定せんとする事は，

世界を通じての一般的主流をなす経済発達の段階の存在を，前提しているからに外ならぬ。此の事の方法論的意味は次の如きものである。歴史的方法の目指す所は，経済現象の間に実現された，或は実現されつゝある，共通型平均型としての時代相を検出する。更に進んでは，認識された此の時代相の前後の間に於て存在する必然的関係を，法則として認識するにある。

かくの如く，経済発達の時代的段階といふものを一応前提しつゝ，此の時代的段階と，鰹漁業が如何なる連絡を保ちつゝ発達して來たか。鰹漁業が，何故に一般経済の資本主義時代たる現段階に於て，過去の衣裳を一面に於てまとつているか。鰹漁業がより高度の資本主義化するといふ場合には，如何なる既有の條件を廃棄し，或は新なる條件を具備しなければならないか。現代鰹漁業の諸問題は因つて來たる過去に迄遡らねばならない。此の点に就ては，歴史学派の Wilhelm Roscher の次の一句は，参考に供すべきである。

> 例えば定率実物負担，徭役，ツンフト制度，会社独占等が，何時，何処で，何故に，廃棄されねばならぬかと正しく判断し得るやうな者は，それ等事実が，如何なる理由でそれぞれの時代に導入されねばならなかつたかを，充分に認識した者に他ならない (Wilhelm Roscher, Grundriss zu Vorlesungen über die Staatswirtschaft nach Geschichtlicher Methode),

要するに，今日資本主義時代にあり乍ら，未だ完全なる資本主義化を遂げざる鰹漁業の性格を明にするには，前述の如き歴史的方法に依らざるを得ないのである。

歴史的方法は大摑みに二つに分ち得る。一は所謂歴史学派と稱する経済学を組織したものであり，二には Karl Marx に依つて稱えられた唯物史観による方法である。

先づ所謂歴史学派より瞥見を加えてゆく。一口に歴史学派と稱しても，旧歴史学派 Wilhem Roscher, Bruno Hildebrand, Karl Knies あり，新歴史学派Gustav Schmoller, Brentano, Wagner, Karl Bücher, あり，一概に論じ去り難い。歴史学派にも歴史的過程が存在する。彼等は，古典学派を万国主義，絶体主義，個人主義乃至唯物主義と批難し，国民主義，相対主義，倫理主義を主張し，経済学の研究対象は，前記学派の如く現代資本主義社会に限定せず，広く人類の過去及び現在の経済生活となし，その課題をば交換経済の機構乃至その法則ではなく，各国民の経済発達の説明にありとする。從つてその研究方法は抽象的分離的乃至演繹的の方法ではなく，具体的歴史的乃至帰納的方法なりとした。是等の点は，何れも共通して歴史学派の人々によつて力説されたのである。そして彼等は究局に於て，歴史進化の法則を帰納せんとした。例へばKarl Bücher は從來の研究法の不完全なりしことを，最も明かに認め得るものは，旧き時代の経済或は文化未

だ開けざる民族の経済に対し，現代の文明人の経済方法を区別する特徴を與ふるその方法即ち之である。この特徴を與ふるといふ事は，所謂進化の段階を立つるの謂にして……大胆に云はゞ進化の法則を発見するにあり（Karl Bücher, Die Entstehung der Volkswirtschaft）と云つている事によつて窺はれる。

所で，究局に於ては経驗的歴史法則を狙つていたとはいえ，実際に於ては，彼等の研究の重点が具体的個別的問題に存在した爲，研究の結果が遂には此の方面に墮した憾があつた，特に Schmoller に至つては，此の傾向が極端に認められている。Schmoller の見解については，後にやゝ詳細に追跡しようと思うが，彼が此の方面に極端に走つたその限りに於て，歴史理論を軽視したと云はざるを得ない。Schumpeter の如きは，嚴格に云えば，歴史学派は Schmoller に始まると云つているが，その Schmoller にしてかくの如くであつた。扨　当面の問題たる経済発展段階説にかえる。歴史学派の人々が，段階説を主張するに当つては，夫々標準を設け，此の標準に照らして経済発達の過程を整理している。從つて，標準の異るにつれて各種の段階説が見られるのである。勿論，今は詳細に立ち入る事は出來ないが，項目的に是を見ると，第一に生産的見地に基く標準にて整理分類を試みた者に，Friedrich List (1789—1846) ＞Das Nationale System der Politischen Oekonomie＜あり Ernest Grosse＞Die Formen der Familie und die Formen der Wirtschaft＜等がある。第二に交換現象に基く分類をなした者には Bruno Hildebrand (1812—1878)＞Die National Ökonomie der Gegenwart und zukunft＜ や Adolf Heinrich Gotthilf Wagner (1835—1917) ＞Lehr-und Handbuch der Politischen Oekonomie＜等がある。第三に経済団体に基く分類説をたてた人には Karl Bücher (1847—1930)＞Die Entstehung der Volkswirtschaft＞がある。第四に政治組織に基く分類を行える者に Gustav Schmoller (1838—1917)＞Grundriss der allgemeinen Volks-wirtschaftslehre＜がある。

以上に依つて明な如く，段階説は人を異にするに從つて区区としている。此の事は，先にも述べた如く，此の派の人々が抽象化一般化を避け，具体的個別的な研究に熱中した事にも由來している。又此の派の多くは，段階説を取り乍らも，歴史が一の段階から次の段階へ進転して行く場合，共通的普遍的原動力を認識せず，唯史実によつて歴史的段階を分類整理したに過ぎぬ観あらしめている。是は，此の段階説が，経済法則として承認され難い事を思はしむる。從つて，歴史学派を全体として見る時，歴史理論に欠くる所あるを痛感せざるを得ない。

歴史学派が具体的個別的の研究に主力をそゝぎ，理論をやゝ軽視した爲，その研究結果

がたかだか発展段階説として，時代の分類を行ふ程度に止まつていた時，唯物史観は抽象的一般的なる歴史理論として提示された。唯物史観は，正に歴史学派とは対庶的な存在にして，明快な論理を持つ歴史理論であるに止まらず，それは歴史的実在に作用する自然的法則であると説かれている。曰く

人間は其の生活の社会的生産に於いて，一定の必然的の彼等の意志から独立した関係を即ち物質的生産力の或る一定発達段階に応当する所の，諸々の生産関係を，認容する事となる。是等の生産関係の總和は，社会の経済的構造を形成する。即ち法制上及び政治上の上層建築が，その上に聳立するところの，さうして一定の社会的意識形態が之に対当するところの，現実の土台を形成する。物質的生活の生産方法は，社会的政治的精神的生活行程一般を條件づける。人間の意識が彼等の存在を決定するのではなくて，その反対に，人間の社会的存在が彼等の意識を定めるのである。社会の物質的生産力は，その発達の或る一定段階では，現存の生産関係，即ち單に此のことの法的表現に過ぎないのであるが，物質的生産力が，是れまでその範囲内で活動して來たところの，所有関係と矛盾することゝなる。此等の関係は，生産力の発達形態から転じてその桎梏となる。斯くて社会革命の時代が到來する。経済的基礎の変動と共に，厖大なる全上部構造が，或は徐々に，或は急激に変革する。斯くの如き変革を考察するに当つては，吾々は常に経済的生存條件に於いての，嚴密に自然科学的説明のつく物質的変革と，人間が此の衝突を意識し，それと戦ふところの法制上政治上宗教上芸術上或は哲学上の，簡言すれば観念上の諸形態とを区別しなければならぬ。個人が自分自身をどういう風に考えているかに據つて，その個人を判断出來ないのと同じやうに，斯くの如き変革時代を，その時代の意識から判断することは出來ない。寧ろ吾々は，此の意識をば物質的生活の矛盾から，社会生産力と生産関係との間に現存する軋轢から説明しなければならぬ。

と，そして具体的なる歴史発展の段階については

大体輪廓的にいうならば，アジアの生産方法，古代の生産方法，封建的生産方法及び近代的ブルヂオア的生産方法を以て，経済構成の進歩段階と呼ぶことが出來よう（経済学批判序言）

と云つている。

(2)

以上に於て本論文の方法が，何故に歴史的方法を採らざるを得なかつたかを明にしたし更に歴史的方法に夫々の特色をもつ歴史学派と唯物史観との二つあることも了解したのである。次に進んで，然らば何故に理論的に勝れたる唯物史観をそのまゝ踏襲せず，是を案

出的手段として利用するか，という点を論究しなければならない。それには唯物史観の批判より初める。唯物史観の批判は，既往に於て数多の面よりなされているが，此処には上部構造の観念型態と下部構造の生産力の発展との関係という点について試みたい。それには先づ上部構造の如何なるものであるかより説いてゆくのを順序とする。大森義太郎氏は云う

生産関係の変化と共に，これによつて規定されたるものとしての上層建築が変化することは，もとより必然でなければならない。例えば上層建築としての政治は，経済の変化に従つて変化する。そして新なる生産関係が成立すると共に，上層建築もまた全く新なるものとなる。たゞ上層建築は相対的であるが，独立の存在を持つものであるから，特に上層建築のうちのいはゆる精神的文化の諸形態は，その特殊なる性質からしてしばしば後にいたるまで殘存する。しかし遂にはこれも全く新たなるものとなる。

上層建築の変化が完了されると共に，こゝに社会変革の過程が完了する。旧社会の沒落の後に新社会が成立する。やがて又新社会そのものゝ変革の過程が始まる。かゝる絶えざる社会変革の過程それが人類の歴史である。(大森義太郎　唯物史観)

扨，特に此処では，精神的文化中の一なる芸術を採りあげて，唯物史観を吟味したい。此の史観によれば，芸術も生産力の発展段階に応じて生滅の過程を辿る。然し此の見解は，果してよく事実を説明し得るであらうか。古代ギリシヤ社会に生誕したギリシヤ悲劇が，今日尚生命を持ち，読者の心を打つは何と解すべきか。我国上代の詩歌，殊に万葉集に盛られた素朴な歌謡が，今日尚我国民の胸をうちて止まぬのは何と解すべきか。若し大森氏の立言の如く，芸術品も生産力の発展段階に応じて生滅するとせば，ギリシヤ悲劇も万葉集も，その他あらゆる芸術品と共に是等が生れた時代の壞滅と共に消滅の運命を負はねばならぬものである。所が歴史的現実に於ては，あらゆる時代の優れた芸術品は，今日尚脈々として生命を持つているのである。

次にアー・ボグダノフ(本名＝Alexander Alexandelwitch Marinowski)の見解を見る。

封建時代の芸術家は，神々の像を彫刻した。彼及び当時の人々にとつては，この創作物は宗教的意味を有し，権威的感情と思想を具体化したものであり，高き組織的権力の形像であつた。併しこの彫刻像が，例えば個人主義的交換文化の時代に発掘されて発見されるならば，こゝでもそれは立派な芸術作品として重大な價値を保有しうるが，その意味は全く異る。決して宗教的意味に於てゞはない。それは鑑賞者にとつては，純粋な個人的美及び力の形象として，或は美及び力の観念の具体化として現はれる。然るに，それが集団主義的意識の時代にまで殘ると，新しき意味をもつに至る。人はその像の中に，

芸術家によつてあらはされた集団の——共同団体の，種族の，階級の，——生活理想を見且つ感ずる。即ちこの集団の数世紀にわたる努力と感情と信仰の共通的表現を見る。

（アー・ボグダノフ，社会意識学概論）

と。第一彼に従えば封建時代に彫刻された神の像に対して，一般民衆の芸術心或は審美心といふものは，封建時代には存在せず，資本主義時代に於て突如として出現した如き感を懐かしめられる。是れに対し封建時代の芸術家が，彫刻した神々の像は，勿論権威的感情の表現であつた事は事実であるにしても，それが同時に優れた美術品であつたという事を如何して肯定出來ないであらうかと疑わざるを得ない。第二彼に従えば，従來の芸術が新しき時代に廃棄されるという事を否定している。是はよいとして，進んで總て新しき時代の高度の芸術は古き時代の低度の物より芸術的遺産を受取り，是を独自の様式によつて利用するとなしている。勿論此の様な場合もあるであろうが，我々は卒直に芸術品は，生産力の発展段階の如何によつて決定される事なく（勿論段階の時代的特色はあるにしても）人間生活を古代より悠久に貫ぬく個性を持つ事を認めざるを得ない。それは次の如き理由によつてゞある。此処には文学を例にとつて論ずる。本間久雄氏は曰く

文学とは人間の内部の感情が文辞に托して表現されたところのものであり，且それの起源が人間本來の自我（情緒）表現本能とも名づくべき本能の衝動に外ならぬ事は，信ずるに足るべき眞理である。更に我々はその所謂情緒の表現が，吾人の実際生活（芸術活動を除く）に於けるそれと異つた，一種特別の快感を伴つた表現である。そこで茲に起る問題は，文学の内容の主要素たるその所謂一種特別な感情とは如何なるものであるかという事である。

第一に吾々の氣付くことは，文学として表現される情緒は，苟くもその表現が文学として認められる以上，日常吾々がざらに経験しているやうな，瞬間に生起して瞬間に消滅しつゝあるやうな力の弱い情緒であつてはならないことである，又それの表現が，僅かに一二の対者に刺戟を與えるに止まるやうな情緒であつてはならぬことも直ちに考へられる。而してこうした理由から，吾々が結局文学として表現せらるべき情緒の特質として承認すべきものは，殺那的の反対の永久的，特個的の反対の普遍的と云う二つの特質であることも亦明かなことである。

ところで茲に不思議に思うことは，その所謂永久的な感情というものは，本來殺那的のものであり，絶えず変化しつゝあるものであつて，永久的という事とは全く相容れないやうに思はれるからである。けれども，感情の永久的ということは，知識の永久的という事とはちがう。即ち個々の感情は本來瞬間的に生じ且滅しつゝあるものであるには相

違ないけれども，人類一般の感情の性質に通有の点の存する事も亦事実であつて，個々の感情の聯続から生ずる波動は，各瞬間に起伏しつゝあるにもかゝはらず，此の人類一般に共通した感情の流れは，洋々として各時代を通じて変らないのである。

而してそこに即ち感情の永久性といふものが成り立つのである。例へば，ホーマーなりダンテなりの時代に存していたさまざまの学術が廃れたけれども，ホーマーなりダンテなりの文学は，今日に至る迄もそのまゝ生きている。それは何故かと云うと。彼等の表現した感情が古今不滅の人情に訴へているからである。即ち永久性を有する感情というのは，かくの如き感情をいうのである。

次に普遍性を有する感情ということであるが，これも前述の所謂感情の永久性ということが理解されゝば，おのづから理解されることである，即ち本來殺那的であり個的である感情も，それが文学として表現せられ人類一般の感情に訴へられる時に，永久性を発揮して來るといふことは，とりも直さず空間的にもその感情が普遍性を有するといふ事なので，之を他の言葉でいえば感情の社会性という事にもなる。（本間久雄，文学概論）

以上述べた所は，芸術たる文学が生産力発展の各段階を通じて，生命を有するという事である。勿論上代の，中世の，或は近代の夫々の文学は，夫々の時代的性格を持つている。時代に応じての色彩を持つている。然し文学が文学として生命を持つのは，時代色に色付けられたという点に存するに非ずして，人類に共通した人間感情を昂揚して，人間一般の心情に強く訴える力を持つているという所にある。さればこそ，生命は短し芸術は長しという意味の言辞さへ生れているのであらう。

凡そ唯物史観がその生命を持つのは，観念形態（芸術をも含めて）が生産力の発展段階に応じて制約されるという，歴史の一元的説明を試みる点にある。然るに，前來述べた如く，芸術の一貫性を主張する時は，是によつて一方に独立した観念形態を認めた事となりその限り唯物史観は破壊されて二元又は二面史観となる。

宗教についても，芸術に就て試みた主張と相似た立言が出來るとはれる。Max Scheler 曰く

人は決して——カール・マルクスが考えたやうに——宗教的理念界を，直接に歴史的構造から，況んやまして單に経済的生産関係のみから導出し得るものではない。却つて，両者は内的に密接に結合し，存在に対する共通的な最後の見解と態度とを構成している仮令それは認識し基礎付けるに頗る困難であらうとも，然も斯くの如き統一帯が成立することなく，人間の全生活が最早生き生きと内面から宗教的に横溢しないならば，宗教は死せる因襲となつて了うであらう。その時宗教は，最早人間を超越的なる者乃至聖な

る者のあらゆる見解の眞の本質に於てのやうに合一せず，却つて区別し分離する。そして又その時初めて，宗教はマルクスがまたそれをその最後の本質に於て思い誤つたところのものとなる。即ちあらゆる種類の精神的ならざる関係の表現，殘存して固定された社会的至状態の一つの階段の爲に役立つイデオロギとなる。(マツクス・シエラー，哲学的人間学)

以上は，芸術及び宗教を例にとり，是が社会の下部構造たる経済関係によつてのみ，一義的に決定され得るものではないといふ事を明にしたのである。経済関係によつて，観念形態が決定されないとする立場は，唯心論と唯物論の対立である。唯心論と唯物論を対立せしめて，二元論的立場を採るか。或は両者を対立せしめず，それは本來一つのものゝ両面であるといふ二面的史観となすか。是は別の問題である。是に関し端的に私見を述べよう。人間認識の究局の目的は，雜多な現象を統一的に把へんとするにある。此の故に二元論的史観は却けられて，二面的史観が求めらるべきである。二面的史観をとる根據としては，既に Max Scheler も論じた如く，人間は分つ可らざる所の物心二つより成るが，それは本來的に一体をなす存在であり，唯夫々の側面として，精神面と物質面とを見得るに止まるといふ存在論的立場にある故である。但し本論文の方法論としては，此の問題に立ち入る必要はない様に思ふ。此処では，唯経済関係にのみよりて，観念形態が一義的に決定されるという見解の成立し難き事を明にすれば足りる。

唯物史観に対する右の如き難点は，既にマルクス学派陣營内に於てさえ指摘されているその著名なる人は Eduart Bernstein である。彼はマルキシズムの改造なる論文の中で唯物史観の中で多元的説明を許容している。やゝ長文の嫌はあるがその一節を引用する。

尙又フリードリツヒエンゲルスがカール・マルクスの存命中，マルクスと共同してデューリングに対して歴史的唯物論に関して駁論をした説明に於いては，人間の生産関係に從属する程度が，非常に條件づけられたものかの如く見える。その説明は「一切の社会的変化及び政治的変革の最後の諸原因」は，人間の頭脳の中よりはむしろ「生産方法及び交換方法の変化の中に」求むべきであるというのである。併し乍ら，此の最後の原因には，是等と共仂の原因となる他の種類の原因，即ち第二位，第三位……等の諸原因が含まれている。そして斯様な原因の連続が長大になればなる程，最後の原因の決定力は質的にも又量的にも益々制限されることが多くなるという事は明瞭である。即ち右の決定力の效力は事実である。が事実の最終の形態は，單にそれのみに依存するのではないのである。が各種の力が，それぞれに仂いて生ずるところの作用なるものは，その總べての力が十分に知られ，且つその力の至價値に依つて評價される場合にあらざれば，確

実に側定され得ない，而も如何なる数学者でも知つているやうに，非常に低位な力でさえも，之れを無視せんか，最大の偏歪を招來することもあり得るのである……

如何なる場合にも，多種多様の要素が存在するのであつて，是等諸要素の間に存する関係を極めて精密に調査し，以つて当面の場合に在つては，当時の最も強力なる原動力を何処に求むべきかを確実に決定することは，決して常に容易なことではない。先づ純経済的原因なるものは，單に一定の思想を受け入れるための地素を創るに過ぎないものであつて，次ぎに此思想が如何にして発生し，又拡張し，又如何なる形態をとるかということは，懸つてそれに及ぼす多数の諸影響の共同作用にある。然るにもしも純経済的以外の性質を有するものゝ勢力を力説したり，又生産技術及び生産技術上予見される発達以外の経済要素を顧慮したりすることを以て，初めから之を折衷説として頑として排斥するならば，是れ歴史的唯物論を益するよりも，寧ろ之れを害することになる。抑も折衷説——即ち現象の種々なる説明及び取材方法の中から選択することである——なるものは，多くの場合，單に万事を一事より演繹し，又万事を全然同一方法に據つて取扱はんとする，一徹な理論に対する自然に生れた反動たるに過ぎないものである。そして斯様な一徹さが甚しくなるや，折衷的精神は常に原子的勢力を以て活路を開くであらう。そして此折衷的精神こそ，各教義に内在するところの思想を〃スペイン式の長靴の中に締め入れ〃（一定の型に入れる意味）んとする傾向に対する，眞面目なる叛逆でなければならぬ。

と，彼自身の基本的考へ方を判然と披歴している。そして更に進んで唯物史観を具体的にとりあげ，次の如く論じている。

唯物史観は，今日その祖述者によつて初め與えられた形体とは，異なる形体になつているのである。更に唯物史観は，創述者その人達によつて発達をとげ，創述者その人達に依つて又その絶対的解釈に制限をうけたのである。此事は既に述べたやうに，如何なる学説の歴史にもある事である。故にエンゲルスのコンラード・シュミツトに宛てた書簡及び「ゾチアーリスチツシエン・アカデミケル」誌上で公開された書簡に於いて，唯物史観に與えたところの完成せる形式から，最初の諸定義に復帰するということ，又その史観に此諸定義に立脚せる一元論的意義を與うることは，恐らく最も大なる退歩に相違ない。故に最初の諸定義は，むしろ是等の書簡に依つて，補足せらるべきものである。げに唯物史観は，最初の形式を以てマルクスの掌中に於いては歴史上の大発見の槓杆になることは出來たけれども而も彼の天稟の才を以てしても，此の唯物史観によつて各種の謬れる結論に導かれて行つたのである。況んやマルクスの才能も，亦マルクスの知識をも有せざる人々に於てをや，唯物史観は社会主義学説の科学的基礎としては，前述の

如き拡張解釈をすることによつてのみ，今日も尙價値を有し得る。若し先にも述べた様な方法により，他の力を加入せしめる事によつて，唯物史観を拡張してゆくならば，果して此唯物史観は如何なる点までその名稱の保持を要求し得るか，実際エンゲルスの既揭の説明によれば，唯物史観なるものは，純唯物的のものではない。況んや純経済的なるに於てをや，私は名稱と事物とが，必しも完全に一致するものではないということを否定はしない。併し私は進歩といふものを，概念を不明ならしめることには求めずして，正確ならしめることに求める。そして或る歴史学説に名稱づける場合，わけても重要な問題は，その学説が他の学説と如何なる点に於て区別されるかを認識せしめることであるから，私はバルトの附した名稱の経済的歴史観に反対しようなどは夢にも思はない。（ベルンシユタイン，マルキシズムの改造）と。彼の主張は多元的史觀である。先にも述べた如く，多元的史觀は此の儘の姿にては採り難い。が是と二面的史觀に鑄直す時には，筆者もそれに讃意を表する。唯注意すべきは，二面的史観はそれ自体としては未だ経驗的な歴史法則ではなく，仮説の域に止まるという事である。それは兎に角 Bernstein の見解に対して，当然反駁の議論が提出されている。それは，Karl Kauts ky のマルキシズム修正の駁論と題する一文である。内容は飽迄史的一元論を主張したもので，別に新鮮味は感ぜられない。

Bernstein は古い方法に敵対する丈けに滿足して，その代りに新しい方法を置くことなどは必要と考へていない。彼は一定の方法がなくても，結構すましてゆけるのである。だが彼は無意識ながらも常にやはり古い唯物論的方法を利用しているが，これは彼れの全卷を一貫している事実である。然し彼は古い唯物論的方法論を不充分だと宣言しているからには，その方法論の結論が，彼れにとつて都合が悪くなれば，それから離れ去る当然の権利を持つているわけである。社会主義に，一つの純唯物論的基礎を與えることを彼が拒否しているのは，特筆大書すべき事柄である。（カウツキー，マルキシズム修正の駁論）

(3)

以上に於て，唯物史観を以てしては歴史的実在としての観念形態の完全なる説明は困難であり，現実をよりよく説明する爲には，二元的史観に移行するか或は存在論を前提しての二面的史観によらざるを得ないことを論じた。更に又観念形態にのみ限らず，社会経済的事象に関して，マルキシズム陣營内に於ても多元的見解をとる学者が存し，是を反駁して史的一元論を固執する学者のあることも述べた。一体唯物史観の公式を回つて，何故に見解がかくの如く紛糾するのであらうか。

問題は，唯物史観を歴史的実在に作用する法則として認定したにかゝわらず，現実の歴史的社会が此の法則通り運行しない点に胚胎する。かくて，一部学者は此の史観を実在の法則たり得ずと批判して，別箇の法則を或は史観を樹立する方向に進んだ。例えば我国の高田保馬博士は，博士独自の立場から唯物史観を批判して（階級及び第三史観中の論文及び生産力の自己運動＝経済論叢　等の諸論文）社会史観を展開されている。碩学 Werner Sombart が，近代資本主義に採用した勝れた綜合的な史観も，此処で参考すべきであるかゝる行き方も可能であらう。然し私はかゝる行き方を採らない。唯物史観をそれ自体としては一応成立するものと見る。是を成立せしむる爲には，此の史観を歴史的実在に作用する自然的法則とは見ない。それは歴史的実在を理解し進みてはそれを整理し法則化する爲に必要な索出的意味を持つ所の，云はゞ理想型概念として取りあげるのである。周知の様に，理想型概念はMax Weberによつて問題とされた。唯物史観を理想型概念として取りあげる前に，Max Weber の考え方より略述してゆきたい。

扨 Max Weber は，理想型概念をGustav Schmoller 及びCarl Menger の方法論爭を楔機として展開した。彼は考える。歴史的社会的文化科学の最後の目標は，……歴史的個体の理解である。然し此の理解が，科学的客観的性格を持つ爲には，直観による描写ではなくして，Menger の志向する如き一義的な精密な概念に俟たなければならない。所が此の概念が，自然科学的概念構成に倣つて，多様な実在からの無自覺な抽象によつて固定的になされるとしたら，それは流動する歴史の科学的理解手段としては不適当である。即ち歴史的文化科学の諸概念は，彈力性に富むものであり乍ら，然も論理的一義性を有するを要する。かくしてこそ歴史的個体の理解手段たり得るのである。かやうな條件を充たして構成せられる概念を，理想型と名づけるのであると。

Schmoller の見解については後に論ずる。此処では今少しく Weber の敍述を引用しつゝ，彼の理想型概念と，それと唯物史観との結びつきを紹介したい。彼は先づ社会科学の出発点に関して云う。

社会科学の関心の出発点は，我々を囲繞する社会的文化生活の――普遍的なと云つてそのためにもとより個性的な姿を失はぬ聯関並びに，他の勿論これまた同様に個性的な形をもつた社会文化狀勢からの生成における――現実的な，從つて個性的な姿態である。

と，かくて彼の関心は飽迄個性的なる文化現象の理解に存した訳である。何故に然るか。

我々が求めているのは一つの歴史的な，つまりその特性において意義ある現象の認識に外ならぬ。そして此の際，決定的なことは，限りなき豊かな現象の限りある部分だけが有意義であるという前提によつてのみ，個性的現象の認識という思想が，一般に論理的

意味をもつという事である。生起の一切の法則に関する，考えられる限りの包括的な知識を以てしてさえも，或る個性的事実の因果的説明は，一般に如何にして可能であるかという問題に対しては，途方にくれてしまうだらう。けだし実在の極微の截片を記述することだけでも，到底遺漏のないものとは考えられないからである。

と。従つて彼によれば，文化現象の法則的取扱ひは，極めて低く評價されている。此の点は，筆者の見解とは大分に逕庭が存するが，それは後にゆづる。かくて彼によれば，次の如き表現が少しの不思議もなく可能である。

経験的なものを，法則に還元することでなければならぬという意味に於ける，文化事象の客観的取扱いが無意味だということは，文化現象又は精神現象が客観的には法則的に生起することが少ないからではない。さうではなくて(一)社会的諸法則の認識は，社会的実在の認識では決してなくて，かえつてこの目的のために，我々の思惟が用いる種々の補助手段の一つに過ぎないからであり，(二) 常に個性的な形姿を持つ生の現実が，一定の個々の関係において，我々に対して有する意義を基礎とする以外には，如何なる文化現象の認識も考えられないからである。ところが如何なる意味で，また如何なる関係において，さうなのかは法則が明かにしてくれる所ではない。何故なら，この事は，價値理念に従つて決定されるからであつて，我々は個々の場合に，いつも此の價値理念の下に文化を考察するのである。

既に述べた如く，彼の見解は Menger とSchmoller の論爭を楔機としている。彼が此処で法則というのは，奥太利学派経済学のそれを指している。彼は云う。

調停の途のない，且つ見たところ超え難い峻しさにおいて，今日も尙ほ抽象的理論的方法は，経験的歴史的探究に対立している。前者は，法則の定式化を以て，実在の歴史的認識に代えること……が，方法的に不可能なことを全く正当に認めている。

然し乍ら，彼に果せられた仕事の一つは，此の超え難い峻しさにある両者を，如何にかして関連附けしめんとするに存したとも云へるだろう。此処に於て，彼は此の抽象的経済理論を理想型概念として取り扱うに至つたのである。その間の消息は次の一節によつてあます所なく述べられている。

抽象的経済理論は，歴史現象の理念 Idea と呼び慣はされているところの綜合の一例である。それは，交換経済的社会組織，自由競爭並びに嚴密に合理的な行爲をもつた商品市場における，諸事象の理想像を見せてくれる。この思想像は，歴史的生活の一定の関係と事象とを結合して，思惟された諸聯関の矛盾のない世界を作り上げる。内容上此の構想は，ユートピアの性格を帶び，実在の一定の要素の思想的高昇によつて獲られたも

のである。此の構想の，経験的に與えられた生活事実に対する関係は，專ら次の点に存する。即ち，その構想の中で，抽象的に敍述されている種類の諸聯関即ち（例えば）市場に依存する諸事象が，現実のなかで何等かの程度で仂いていることが確定され，又は推定された場合には，ひとつの理想型に照らして，この聯関の特性を実際的に明瞭ならしめ，且つ理解し易からしめることが可能だという点である。此の可能性は，索出的であり，敍述にとつて價値がある丈けでなく，むしろ欠くべからざるものであらう。研究にとつては，理想型的概念は帰属判断を教え込む。それは仮説ではなく，仮説の構成に方向を指示する。それは現実的なるものゝ敍述ではなく，敍述に対して明確な表現手段を與える。即ちそれは，歴史的に與えられた近代の交換経済社会組織の理念であつて，例えば中世の都市経済の理念が，発生的概念として構成された場合と全く同一の論理的原理によつて展開される。

此の場合都市経済の概念は，観察されたすべの都市の中に事実上存在する経済諸原理の平均という様なものとしてゞなく，やはり一つの理想型として構成されるのである。それは一個の又は若干の観点の一面的に高揚された観点に合するところの，こゝには多くかしこには少く，処によつては全くないという様に，分散して存在する夥しい個々の現象を，それ自体において統一された，一つの思想像に結合することによつて獲得されるこの思想像は，その概念的な純粋性において，現実のうちには何処にも経験的には見出され得ない。それは一個のユートピアである。

かくの如くして得られた理想型は，然らば如何なる役目を研究過程に於てはたすものであらうか。

理想型は，一の思想像であつて，歴史的実在であるのでもなければ，まして本來の実在であるわけはなく，況んやそれは，実在が類例としてその中に配列さるべき一の図式の役目を果すためにあるのでもない。かえつてそれは，一の純粋に理想的な極限概念の意味をもつのであり，我々はそれによつて，実在を測定し，比較し，以てその経験的内容の中の一定の意義ある部分を明瞭ならしめるのである。

尙，彼は進んで，理想型概念の考え方を，歴史発展という時代の永い流れに迄適用するに至つている。

是迄，我々は主として生起の流れの中に持続するものとして，それについて発展が成り立つ歴史的個体として表象されるところの，諸聯関についての，抽象的概念としてのみ理想型を取り扱つて來た。所がこゝに一つの込み入つた事柄が生ずる。それは社会科学の目標は，実在を法則に還元するということでなければならぬという，自然主義的偏見

が類型的なものゝ概念に助けられて，いとも容易に忍び込ませたものである。発展も亦理想型として構成され，この構成は非常に高い索出的價値をもつことが出來る。

彼の理想型は，大体以上の如き構成を持つものである。所で彼は又唯物史観についても理想型構成の立場より，鋭い批判を加えている。曰く

社会現象と文化現象とを，その経済的制約性と重要性という特殊観点から分析することは，創造的效果をもつた一つの科学的原理であつたし，また注意深く利用して独断に囚はれさえしなければ，今後いつまでも然るであらう。世界観としての，又は歴史的実在の因果的説明原理の公分母としての所謂唯物史観は，断じて拒否すべきである。

と。然らば彼は，唯物史観をば如何なる意味に於ても取りあげなかつたか。否。彼は独自の立場からそれを理想型概念として取りあげたのである。

一切の，特にマルクス主義的な法則や発展構成は——理論的に欠陥なき限り——理想型の性格をもつているということを確認する……実在を理想型と比較するために利用する場合において，理想型のもつ優れたいな独特の索出的意義，並びに理想型が経験的に妥当すると考えられたり，或は実在的な（即ち実は形而上学的な）作用力，傾向等と考へられるときの危険性とは，かつてマルクス主義的概念を取扱つた人は誰でも知つている

唯物史観をかくの如く規定した彼は，從つて，此の史観の利用及び效果を次の如く論じている。彼の基本的立場から見れば，当然な所論であらう。

ところで，経験的歴史的な発展の経過が……構成せられた経過と同じであつたかどうかということは，この構成を索出的手段として採用しつゝ，理想型と事実とを比較することによつて，初めて吟味され得るであらう。もし理想型が正しく構成されていて，事実上の経過が理想型の経過に照応するとすれば，理想型は仮説の験証であつたのである。理想型的な発展構成と，歴史とは峻別せらるべき二つのものであり，またこの構成は，こゝでは一つの歴史的事象を，我々の認識の現状によつて知り得る諸原因のなかゝらとり出した当該事象の眞実の原因え，計画的に正しく帰属させるための手段に過ぎなかつたということを，常に念頭に置くべきである。(Max Weber, Die "Objektivität" Sozialwissenschaftlicher und sozialpolitischer Erkenntnis)

かくの如く見來たれば，唯物史観は，歴史的実在に於ける経済関係を一面的に高昇して，其処に論理的必然性を持たしめんとする，理想型である。

(4)

以上の如くしてMax Weberは，理想型概念としての唯物史観を索出的方法として取りあげ，それによつて文化現象としての経済的個性を理解する事を深からしめようとする。

凡そ歴史社会を研究対象とする社会科学の方法として，個性化的方法をとるか普遍化的方法をとるかは学問の分れる点である。両者の関係を見るに，個性によりて普遍を知る能はず，普遍によりて個性を知る能はず，個性と普遍的関係とは相互に通約すべからざる性質のものである。所で筆者は普遍化的方法の立場に立つ。此の立場に於ては，対象の上に普遍化を加へ以て之を支配する法則体系の知識に到達せんとする。此の方法をとる時，社会現象は常に價値を内在せしめているという事が前提されている。かゝる立場に立つ限り，個性化的方法をとる Max Weber とは袂別しなければならず，従つて一応具体的個別的史実を尊重し乍らも，究局に於て歴史法則を目指す所の歴史学派の陣營によらねばならない。然し乍ら，歴史学派の立場に於ても尚唯物史観を理想型概念として取りあげ，個性理解の爲よりも，普遍法則検出の爲の索出的方法として利用し得ると思う。歴史法則は理想型概念に比して，豊富な史料と著しき努力を要する所の，別種の知識であり，従つて，たとえ理想型概念としての唯物史観を索出的方法として利用したにしても，普遍化的考察方法を基礎とする成果であるならば，それは法則体系の学問として見られるであろう。

先に述べた如く，一口に歴史学派と稱するもその中には新旧各派が存する。今此処では筆者は Schmoller に従うて筆を進める。所で歴史的実証的方法をとつた彼は「謂ゆる旧歴史学派国民経済学は，屢々余りにも性急に一般史の成果を理論的に利用しようとする」といひ「生硬な認識は，つねに半ばの眞理と性急な普遍化とから始まる」と極言している勿論彼は，此処で普遍化的方法を放棄した訳では決してない。究極のねらいは法則体系の組織にあつたのであるが，それ迄の研究過程に愼重を期した訳である。此の故に彼は，史実の追求に熱心であつて歴史理論を軽視した感を懐かしめた事は周知の所である。殊に客観的に社会事象を観察する方法を强調し，従つて統計的方法を推奨している「観察は最も早く何処で主観的な欺瞞を免れて，普遍妥当の眞理に到達しえたかを問題とするなら‘それが特定の現象を計量の対象としたときからさうである」となしている。大量観察と同時に彼は亦事象の個性的観察をも尊重した。そして個性の活動を追求してゆくと，その結果は矢張り個性の集合した全体的な綜合的な，従つて普遍的な問題に当面せざるを得ないとなしている。曰く

或科学の対象が簡單であればある程，当該科学に於て敍述は愈々乏しい役割を演ずる。諸現象は定型的であり，齊一に繰返すので，同じ種類の様々な類似の敍述は必要ではない。このことは，素より定にある特定の程度だけではあるが，價格の動搖のやうな基本的国民経済的事象に主としてあてはまる。それには一つの例で十分である。あらゆる複雜なものは，その定型的側面，普遍的特性と共に，個性的なそのもの個有の性格を有つている。一家内工業の敍述は，他のものゝ敍述を不必要とはしない。このことは極めて

大切なことであつて，一聯の重要な哲学者と国民経済学者とは，近頃あらゆる精神科学に於て唯一の個性的現象，その故にまさに因果法則にもたらすことなく，唯芸術家的に敍述し直覺的に理解することが出來る事象をのみ，取扱うと云う主張をしいる。このことは現象群が複雜なれば複雜なるほど，我々の観察する所の人間と，その影響とが偉大にして天才的なればなるほど，其等のものを説明するに伝來の概念，眞理，規則性，法則を以ては不足なものとなるという。それ自体としては正しい事実の誇張なのである…若し歴史はつねに具体的なるもの，及び個性的なるもののみを描くということ，あらゆる普遍的なるものは，歴史の水平線の彼方に在ることが眞実であるならば，その影響は素より限定されたものにとどまるであらう。だが歴史が如何にすぐれて個性的人物，運命，民族をその生成過程に於て明かにするにせよ，それは同様にすぐれて其等の原因の理論的總括はまさに国家諸科学の仕事であるところの社会的事象の心理的な及び制度的なあらゆる普遍的な原因に当面するのである。

進んで彼は，一般歴史と特殊歴史殊に経済史とについては

ひとが相似たことを歴史について云ふことが出來るとすれば，歴史の精神的内容と普遍的性格とは，まさにより多く普遍的成果を担うものであつて，諸原因を発見しうると云うこと，而して若し一般史が本質的に口碑を批判的に検討し，一つの物語りに結合するなら，言語史，法制史，経済史は必然的にそれ以上に進み，分類と整序とを試み，規則性と原因との証明をも共に引き受けるということは，尠くとも忘れられてはならない。

然らば，從來の経済史はどの程度に法則的研究がなされていたか，曰く，

ひとが近頃国民経済的発展法則と名づけたところのものに於ては，経済的生活の幾世紀にも通じて，発展する諸の形態と形成，諸の制度が取扱はれる……ヒルデブランドの相繼起せる自然経済，貨幣経済，信用経済についての理論，私及びビユツヒアーの相繼起する家内（乃至村落）経済，都市経済，領域経済，国民経済及び世界経済についての理論は，斯の種の，最も知られた試みである……大きな統一的な発展方向及び規則性は，実際何れの処に於ても我々の眼前に現れた。我々が其等のものを法則と名づくべきか否かのみが問題である。而して思うに，我々はこれだけになほ未だ十分到達していないから，こゝではその法則という言葉を避けることが遙かに適当である。我々は例えば，今日の統計学の特定の成果にとつて，なほ行はしめている経驗法則の名稱も，こゝで適当しようとはしない……我々はこれによつて，この世界に於ける凡てのものは，原因と法則とに從つて生起するという我々の信念を，況んや我々の認識によつて，或る未來の発展系列の蓋然性を獲得するという希望を，放擲するものではない。

と。最後に，彼は彼が画いている経済史の法則について，次の如く總括して立言しているのである。

観察から出発し，それに加えて観察されたものも説明し，一部類の現象について観察された諸の場合に眞実であるものを，眞実なりと説明するところの規則を求める。ある現象が複雑なればなる程，そして尚殊に最も多種多様な原因の合計に基いているやうな，さういう複雑な対象についての我々の観察が不完全であればある程，正しい規則を見出すべき仕事はより困難であり，それ丈け屢々我々は單に仮説にのみ到達する。即ち繼起の規則制に関する，また原因に関する暫定的な推測にのみ到達するにとゞまる。だが其等のものをも，我々は今やそれ以上の推論に適用する，

帰納によつてかちえられた，因果関係についての規則をさらに適用するとき，帰納と同じ衝動，同じ信仰，同じ悟性の欲望に基く演釈が成立する。正当に観察された諸の場合に眞実であつたものは，あらゆる全く同じ場合に眞実でなければならない。

(Gustav Schmoller, Volkswirtschaft, Volkswirtschaftslehre und-methode)

と。此処迄來れば，彼は明に個性化的方法の遙か彼方に，普遍化的方法を予想して居り，法則体系としての歴史派経済学の組織を望み見ている事を了解し得る。筆者が彼に賛意を表するのも実に此の点にある。

扨唯物史観の嚴密なる構造は Max Weber の云う如く理想型概念であり，それは索出的意味を持つに過ぎない。そのまゝの姿に於て歴史の過程に実現するものではない。然し乍ら是を索出的方法として，各個の国民経済の発達過程を，或は各個の産業分枝の発達過程を検することが出來る，その検出すべき対象に就ては，Schmoller の云う如く，二つの面を見得る。一は個性的面であり。他は普遍的面である。此の二つの面の関係に於て，我々は彼と共に「歴史が如何にすぐれて個性的人物，運命，民族をその生成過程に於て明かにするにせよ，それは同様にすぐれて，其等の原因の理論的總括はまさに国家諸科学の仕事であるところの，社会的事象の心理的な及び制度的なあらゆる普遍的な原因に当面する」故に，究極に於て普遍面を対象として向はねばならぬ。この普遍的面として，各個の国民経済の発達過程を乃至は産業分枝の発達過程をとりあげ整理し得る。その場合，整理の標準というものが必要となる。此の標準を歴史派経済学者は，種々なるものに求めた。或者は生産様式を標準とし或者は交換方法を標準とし，或は経済団体に，更には政治組織を標準とする学者さえ存した。そして此の標準は理想型概念としても取りあげられる。所で筆者は此の標準を一の段階から次の段階へと歴史推進の原理を摑む理想型概念として勝れている所の唯物史観に求める。重ねて云う。此の唯物史観は索出的意味を持つに過ぎな

いものである。索出の結果，或国民経済の発達は完全に是に照応するであらうし，又或産業分枝の発達は若干の程度に於て是に則応するであらう。かくの如く検出して得られたものを帰納する事によつて，其処に歴史的実在に作用する歴史法則としての唯物史観を組織し得られるであらう。我々に経験される歴史法則としての唯物史観は，理想型概念の唯物史観とは，必しも一致するとは断言出來ない。如何なる形の唯物史觀が，我々に経験される法則として歴史に作用しているかは，將來の帰納に俟たねばならない。進みて云えば此の場合，帰納によつて驗証されるを要する仮説が存する筈である。存在論を前提しての二面的史観は，正に仮説の役を營む。Max Weber によれば理想型概念としての唯物史観は此の仮説に方向を與えるに過ぎない。仮説として存在する二面的史観が，経驗的に実証された所のものとして，我々が認識し得る実在の歴史法則を，理想型概念としての唯物史觀と区別するため，Bernstein にならつて経済史観と仮稱しても差支えないと思う。かくして歴史法則としての経済史観の構成は，將來に俟たねばならぬ問題である。Schmolloer と共に当面の仕事として，我々は特殊研究に沈潛しなければならぬ。その場合索出的方法として，理想型概念としての唯物史観を驅使しつつ。曾て唯物史観の公式について Bernstein と Kautsky との間に，緩嚴二様の見解が爭はれて來たのは，仮説乃至は將來構成さるべき歴史法則としての経済史観と理想型概念としての唯物史観との区別を，判然せざりしによるものと思はれる。

(5)

以上の如き基本的立場に立ち，実証的方法を以て研究した日本鰹漁業の経済的研究は，三部に分たれる。

まづ第一部には，鰹漁業が発達すべき母胎としての一般漁業の歴史的基盤を敍述する。その第一篇に，日本漁業史の特殊性を論ずる。日本漁業の変遷を見るに，原始共産制より古代社会乃至封建制を経，更に資本主義的漁業に進みつゝある。所で現代に於て，資本家的漁業の間に伍して，共産制的又は封建制的経營の漁業の少なからざるものを見る。此の現象は，一方には日本在來の漁業が，経營上無計画性であり，豊凶常なき故に，共産制は是を関係人員間にて均等に負担せんとし，封建制は親方の威力財力によつて漁業能率を挙ると共に凶年には親方よりの給與によつて，船方が最低生活維持をなさんとするに由來する。他方外來漁業としてのトロールtrawl 等はその機械的組織的なる経營方法によつて豊凶の差異を克服し，高度の資本制生産化している。漁業の史的流れを発展段階に於て見る時は，唯物史観に則応するも，経營形態発達の甚しき跛行性は漁業の特殊性と見られる。扨漁業に於ける原始共産制や封建制は，從來單に云々される丈けで纒つた論考は存しなか

つた。是を判然させる爲，第二編に漁業共産制史論を据え，第三編に漁業封建制史論を置く。夫々独立論文であると共に，又歴史的発達の序列に於ては相連続している。漁業共産制史論は，日本原始共産体の存在を漁業の面より論究せんとするものである。元來日本原始共産体の存否は，久しい以前より学界の論点であつた。周知の如く，最初内田銀藏博士が之を「我国中古の班田收授法」なる論文に於て主張され，その後是を肯定した学者としては，黒正巖博士の「農業共産制史論」細川亀市教授の「日本原始共産体の研究」等あり是より先，別に福田德三博士は日本経済史論に於て讃意を表されている。反対論を唱うる学者としては，瀧川政次郎博士の「法制史上より見たる日本農民の生活」あり，又福田德三博士は晩年に至り，「唯物史観出立点の再吟味」に於て前説を飜して反対説をとられている。讃否の両論はとも角として，肯定論者の主張はその論証に於て，内田銀藏博士の徵証を援用するに過ぎぬ。その後，石母田正氏等の古代に関する諸研究によつて，その存在が論証されんとしている。漁業共産制史論は，漁村社会に殘存せる代分け制の慣行を素材とし，民俗学的方法の援用によつて，更にこれを推論せんと試みたものである。

第三編の漁業封建制史論は，原始共産社会のあとをうけて古代社会を経，漁村に封建制が確立してゆく過程を取り扱つた。その中心論題として庄園時代より漁村から海賊が生起し，是が一般漁民より抽んでゝ，武士の身分を有する水軍將兵として，次第に分離してゆく過程を是にあてた。あたかも小野武夫博士が日本兵農史論に於て，農村社会に於ける封建制を，兵農分離の姿に於て捉えられた如くに。

一体漁業に於ける史的研究として纒まれる著述は，学友山口和雄氏の日本漁業史存するのみ。(その後先輩羽原又吉氏の力作古代漁業経済史が出版さる) 日本漁業史は技術の発展に力点を置いた学術的香りの豊かなものではあるがそのゆき方が産業史的であり，社会史的階級的見方が加えられて居らぬ。漁業封建制史論は，技術史としての日本漁業史を基礎に予想して，漁村に於ける身分的階層分化に力点を置いた。それと共に，此の間徐々に蓄積されて行つた商業高利貸資本にも注意を拂つた。

以上三編は，共に第一部として日本鰹漁業の経済的研究の序説となるべき部分である。此処を基盤として，日本鰹漁業が如何に発展したかという事実を見んとするのが第二部である。第二部は章を分つ事八。第一章が東北地方の部，第二章が関東地方の部，第三章が中部地方の部，第四章が近畿地方の部，第五章が四国地方の部，第六章が九州地方の部，第七章が余論として土佐国鰹節製造業発達史。然して最後の第八章が總括である，各章(第一——第六) の内部に於て又節を分ち，各府縣別に一節をあてた。論述の中心点は，原始共産制の遺産を曳きづり乍ら (總ての地方ではないが) 封建体制の胎内から発生し発達し

てゆく鰹漁業の実体を見る。殊にそれが，当時或程度に発達しつゝあつた商業高利貸資本と如何にからみ合ひ乍ら進展してゆくかを検討せん事を力めた。その進展の仕方は，地方を異にするに従い差異を呈している。九州地方の如きは船主（親方）が同時に高利貸化し商業資本家と共に漁民（船方）を搾取して居り，四国に於ては商業高利貸業者が産業資本家化する傾向を示し，中部近畿地方の如く共産体的遺制の存する地方に於ては，商業高利貸資本を親方船方が共同一致して驅逐せんとしている。関東地方に於ては，南部の如く，商業資本によつて船主船員が共同して搾取せらる所あると共に，北部茨城縣の如きに於ては船方が船主に対し債務奴隷的存在を示す点に問題を見せている。東北地方に於ては，名子的関係が船主と船方との間を支配している地方と，一部落の部落民が血縁関係にあり乍ら船主対船方が封建制を示している地方とがある。第二部に於ては，かくの如く，地方的性格を摑えつゝ鰹漁業が展開してゆく過程を検討せんとしたものである。何れにしても長期を見渡せば，鰹漁業は徐々乍ら進歩発達していたので、その事は明に生産力の発達として帰結し得る。生産力発達の結果，従來の鰹漁業組織が引率していた鰹節製造業と餌取漁業を，如何にして切り離さざるを得なかつたか。是が第八章總括の中心点となつているのである。此の場合，餌取漁業は各地方の鰹漁業敍述の際夫々觸れて置いたので，更めて立ち入る事はせず，唯敍述の筆の及ばなかつた鰹節製造業については代表的意味に於て土佐国の鰹節製造業発達史を第七章に收めて，その一班を窺はんとしたのである。

第三部は広い意味では第二部の結論である。然し又別に独立論文の体裁をも持つている第三部に於ては，日本の鰹漁業を全体として一括して論じた。その何故にかゝる態度をとつたかといえば，明治末葉から動力機船が利用され始め，これが大正昭和と年月を経るに従つて大規模化し，従つて漁場が拡大して，その結果共通化して來た。漁場の共通化と相併行して，資本の面に於ても，労仂の面に於ても，漸次地方的特殊性を振い落し乍ら，普遍化平均化の一面が作られて來たのである。殊に，太平洋戦爭以後に於て此の傾向が一層顯著となつた。此の故に，鰹漁業を鰹漁業として，一括して取扱うを適当と考えたからである。勿論此の場合，全体を通じて尙原始共産制的乃至封建制的色彩の他の一面を纏つてはゐたが。所でその普遍的共通面の取扱いの場合資本を中心に置いた。親方制生産の場合に於ける家計と未分化の資本形態と，商業高利貸資本との関係及び是等が産業資本として範疇的転化を遂げて，確立してゆく過程を論述の中心に据えた。そして鰹釣労仂及びその技術，漁場利用の度合，最後に收益の分配という工合に章を分つて諸項目を設け，是等の項目内容が資本の変化に則応して如何に変化してゆくかを，明かにする事に努めたのである。結論として求めんとする所はかくして資本主義化し乍ら平均化した鰹漁業経營形態の

現段階が，如何なるものであるかという点に存する。曰く Manufacture 的漁業段階にあると。

Resumé

We take the historical and actual method in economic studies of Japanese Bonito Fisheries for reason of odd characteres in economics of that industries.

Upon the historical method, we complement the lack of thery in Economic stage Theory of Historical school by the logics of Historical materialism, then, we take the Historical materialism only through heuristic method as it contained some inconsistencies, and at last, adjusting them to synthetic theory of history by Ideal Type of Max Weber.

By taking this methodology, we reorganize and constitute the economic development of Japanese Bonito Fisheries.

〔附記　日本鰹漁業の経済的研究なる一篇は昭和24年九州大学農学部に学位論文として提出したものである。審査の労を賜はりたる沢村康博士、相川広秋博士の両先生に深甚の謝意を捧ぐ〕